

序

宗門の命脈は云ふまでもなく教義である。教義なくしては宗門の生命はあり得ない。如何に多くの道俗を有し教団の組織が大であり、また行政上に万全を期しても、その根本生命たる直正な教義を伝持しこれを弘通しなければ、正法は廢頽し延いては大衆をして惡道に墮せしめる大謗法となることは明らかである。

今日日蓮大聖人門下を通觀するに、いずれも一般大乘諸宗と何等相違するところなき実相論を、或は中古天台の延長たる本覚法門を主張して、宗祖大聖人の本懐たる本勝迹劣、上行要付の宗義を歪曲隱蔽し、或は宗祖奠定の曼荼羅本尊を否定して釈迦本仏本尊または日蓮本仏本尊を主張している現状である。

此の如き謬義が漸次拡大してゆけば将来遠からずして大聖人唱導の「法華宗」の正義が地に墮ちるであろう。是は実に悲しむべき伝法上の一大事である。

爰に於て大聖人の正統を傳承せるわが「法華宗」の宗徒は大いに宗祖死身弘法の真正宗義を發揚しなればならない。

序

桂林同学会は本宗再興唱導師日隆聖人が数百巻の大著に互つて疏述せられた指南によつて、宗祖大聖人の真正宗義に対する精確な研究と其の組織を計り、以て内には宗脈の相続を、外には宗義の闡揚を期するものである。

此の「桂林学叢」はその先序として昨夏の研究会に於て講説せる拙論と、会員中四師の發表せる論文とを集録せるものである。これらはその内容に於て必ずしも充分であるとは思つていない。しかしいずれも真摯な研究の成果であつて、前記の目的を達せしめようとする努力に対して大いに感謝するところである。本書が續刊されてゆく毎に完璧となることを望むと共に、わが宗徒がこれによつて信仰増進の上にまた大法弘通の上に裨益するところあらば幸甚である。

昭和三十五年四月二十八日

法華宗興隆学林長

荊 谷 日 任